

私立グレゴリオ学園プロレス研究会

○私立グレゴリオ学園・遠景

海のそばにある学校。

遠くに富士山が見え、目の前には砂浜がある。

○同・校門付近（朝）

夏服姿の男女高校生が、続々と登校してくる。

○同・チャペル前

歩く生徒たち。

「久しぶり」「夏休みどうだった？」などの声飛び交っている。

○同・昇降口・外

上半身裸で、プロレスの覆面を被った男子生徒が二人、腕組みをして立っている。

小柄でやせ気味の成塚圭太（18）。

ぼっちゃりと太っている栗原純平（18）。
二人の背後には「結成！ グレゴリオ学
園プロレス研究会！」「目指せ！ 初代
GWAチャンピオン」などのポスター。
多くの生徒が、不思議そうな顔をして、
その前を通り過ぎていく。

藤原弘樹（17）と江口翔（18）が来て、

藤原「おい、圭太」

圭太「（無視）……」

藤原「おい、なにシカトしてんだよ。お前、

成塚圭太だろうよ？」

圭太「マスクマンに本名で声をかけるバカは

どこのどいつだ？」

藤原「はあ？ お前、なに言ってるんだよ？」

圭太「マスクマンに本名で声をかけるなど
言ってるんだ！」

藤原「じゃあ、なんて名前なんだよ？」

圭太「（詰まる）え？ いや……その」

藤原「ないのかよ！ なんだそれ！」

圭太、マスクを取り、

圭太「なんだよ、うるせえなあ」

江口は、純平の胸毛を、まじまじと見て
いる。

江口「おい、お前、純平だろ？　すげえ胸毛
だな」

純平もマスクを取り、

純平「やめてよ、そういうこと言うの。気に
してんだからさ」

とマスクで胸毛を隠す。

藤原「で、お前ら、何してんだよ？」

圭太「見りゃあ、わかるだろ。新団体を設立
したんだ」

藤原・江口「新団体？」

純平「僕たち、プロレス研究会を作ったんだ。

グレゴリオ祭で大会を開く予定なんだけど、
良かったら、君たちも参加してみない？」

藤原「するか！　俺たちは、こう見えても受
験生なんだよ」

江口「だいたい、高校三年にもなって、なん
で、こんなこと始めたんだよ？　普通引退

する年だろ」

その時、北川奈々（17）が登校してくる。

純平、藤原たちを突き飛ばし、

純平「圭太、来た来た！」

圭太「えっ？ 誰が？」

純平、圭太の耳元に、

純平「（小声で）北川奈々ちゃんが来た！」

○下駄箱

奈々が、上履きに履き替えている。

そこに来る圭太。

圭太「北川」

奈々「ああ、成塚くん。どうしたの？」

圭太「あのさ、俺たち、プロレス研究会作っ

ただけどさ。北川、入らない？（手を

合わせ）ていうか入って、お願い！」

奈々「（あっさり）ごめん。興味ないわ」

圭太「またまた。ネタはあがってんだよ。北

川は、プロレス好きでしょう？」

奈々「全然」

圭太「いやいや、そんなことないって」

と純平を振り返る。

純平は、下駄箱の陰から、はにかんだ笑顔で、圭太たちを、そっと見ている。

圭太「あそこにデブいるでしょう。あいつが北川の大ファンでさ。俺が北川と同じ中学だって知ってから、紹介してくれって、うるさくってさあ」

奈々「あの……ホント悪いんだけどさ」

圭太「ちよっと待ってて」

と言って純平を引っ張ってくる。

純平、胸毛をマスクで隠しながら、

純平「あの、ちよっと待って。まだ心の準備が……ていうか、この格好じゃあ」

圭太「いいから来い！ お前から入部をお願いしろ！」

奈々「あのさあ、はっきり言っておきますけど……」

その時、背後から「なんだお前ら、本当に作っちゃったのか」という男の声。

見ると数学教師の富樫直樹（28）がいる。

圭太・純平「富樫先生！」

富樫「（笑って）お前らバカだなあ。本当に作ったのかよ？」

圭太「そりゃあないよ、先生がプロレス研究会を作れて言ったんだろ」

純平「そうですよ。約束ですからね、ちゃんと顧問になってくださいよ」

富樫「わかった、わかった。で、今は何をしてるんだ？」

圭太「勧誘。隠れプロレスファンの北川さんを、うちの部に入れようと思ってさ」

純平「先生、ちょっと」

と富樫を下駄箱の陰に連れていく。

純平「先生、この部の本当の目的は北川さんなんです。僕たちは、北川奈々ちゃんとお近づきになるためにプロレス研究会を作ったんです。先生、協力してください。僕だって青春したいんです。お願いします！」

なんとなく富樫の反応は鈍い。

富樫「……で、北川はなんて言ってるんだ？」

純平「興味無さそうなふりをしてます。でも僕知ってるんです。彼女はプロレスファンです！ 僕、何度も奈々ちゃんがプロレス雑誌を買ってるところを目撃してるんです。

だから、先生、協力してください」

富樫「だがなあ、本人が乗り気じゃないのなら、無理強いはできんだろ」

奈々の声「あたし、やっぱり入ろうかな」

純平が驚いて振り向くと、すぐそばまで奈々と圭太がきている。

純平「ホ、ホントに？」

奈々「うん。富樫先生が顧問してくれるんでしょう？」

純平「そう！ 富樫先生は凄いんだ。なにしろ六年間も大学でプロレス研究会をやったほどなんだから」

富樫「六年は余計だ」

純平「(奈々に) よ、よろしく！ 僕、栗原純平。圭太と同じクラス。理系だから、あん

まり知らないと思うけど、僕は、北川さんのことよく知ってるんだ！ 本当に、これからよろしくお願いします！」

奈々「(苦笑) うん。よろしく」

と言ってから、満面の笑顔で富樫を見る。

奈々「富樫先生、よろしくお願いします」

富樫「(戸惑い) ああ、まあ、よろしく」

圭太「やったな純平！」

純平「ありがとう。圭太のお陰だ」

圭太「よし、とりあえずグレゴリオ学園プロレス研究会、ここに発足だ！」

○校門

放課後。生徒達が校門から出ていく。

○グラウンド

陽がやや傾き始めている。

野球部やサッカー部が練習をしている。

○砂浜

圭太、純平、奈々がいる。

そして向かい合うように五人の生徒たち。

その五人が、自己紹介を始める。

空手道着を着た伊奈浩二（18）。

伊奈「空手部で主将をやっていた伊奈浩二だ。

格闘全般、なんでも好きなので、プロレス

もやってみたいと思った。よろしく！」

柔道着を着た伏見勲（17）。

伏見「同じく柔道部で部長を務めていた伏見

だ。プロレスのことは何もわからないが、

お互い切磋琢磨して頑張りましょう」

小柄で眼鏡をかけた柴野明彦（18）。

柴野「柴野明彦です」

続きがあるのかと思い、皆が柴野を見る。

しかし、柴野は黙ったまま。

圭太「それで終わりかよ？」

柴野「うん、終わりだけど。なにか？」

圭太「……まあ、いいか。じゃあ次！」

柔道着を着た、ずんぐりとした女子生徒

が前に進み出る。福島可憐（16）。

可憐「柔道部二年の福島可憐です。プロレスの技を柔道に応用できるのではないかと思いい参加しました。一生懸命頑張りますのでよろしくお願いします」

伏見「こいつは強いぞ。高校二年にして全日本女子レベルだからな。将来のオリンピッククも夢じゃない」

可憐、たちまち顔が真っ赤になり照れる。

可憐「そんな、先輩の指導があつたから……」

伏見「いやいや、お前の努力と才能の結果だ。

なにしろ俺は、全国大会なんて夢のまた夢のレベルなんだから」

可憐「そんなことありません。先輩が、先輩が応援してくれたからこそ……」

圭太「(呆れ気味) おい……おい」

黙る可憐。

圭太「もういいか？ まだ自己紹介する奴がいるんだ」

と平井稔(16)を見る。

平井は茶髪でチャラチャラとしている。

平井「どうも二年の平井っス。なんかちよつと面白そうだなと思つて参加しました。あの、一つだけ。マジでお手柔らかにお願いしますね。痛いのが苦手ですから」

伊奈「なんか、痛めつけがいのありそうな奴だな」

伏見「(頷いて) うむ」

平井「ちよつと待つてくださいよ！ お願いしますよ。俺、根性だけは自信ないスから。痛かったら、速攻で辞めます」

圭太「大丈夫だよ。よし、これで全員だな。」

俺は部長の成塚圭太。(純平と奈々を見て) このデブが副部長の栗原純平。こっちの綺麗なお姉さんが北川奈々さん。俺たちの目標は、グレゴリオ祭に参加して大会を開くこと。いいな？ よし練習を始めよう！」

富樫の声「(大声) ちよつと待ったあ！」

声の方を見る。

そこには上半身裸でプロレスの覆面をかぶった富樫が、腕組みをして立っている。

富樫 「俺抜きで練習開始とはいい度胸だな」

圭太 「何言ってるんだよ。先生、早く来いよ」

富樫 「この格好をしてる時の俺を先生と呼ぶな！」

圭太 「じゃあ、なんて呼べばいいんだよ？」

富樫 「そう、マスクド・スーパ―ティチャーと呼んで貰おうか」

柴野 「(呟く) ティチャーは先生だって」

伊奈 「ひよっとして」

伏見 「富樫って」

圭太 「バカなのか？」

富樫、全員の前に立つ。

富樫 「これから練習を始めるにあたって一言言っておく。おい成塚！ プロレスとは何だ？ 言ってみろ」

圭太 「はあ？ プロレスとは……プロのレスリングのこと……だよ」

富樫 「お前からして、その程度か。いいかよく聞け。プロレスとは芸術だ！」

圭太 「芸術？」

富樫「同時に最高のエンタテインメントでもありドラマでもある。つまりは人生と同じだ。わかるか？ プロレスは人生そのものなんだ！」

キョトンとする一同。

平井「正直、さっぱりわからないス」

富樫「それを演じられるのは、心と体を鍛え、神に選ばれた者のみ！ いいか、我々は神に選ばれたんだ！ よし練習を始めるぞ！ まずは体力作りから始める。スクワットを五百回だ！」

純平「五百回？」

圭太「先生、ちょっと待って！ あのさあ」

富樫「（かぶせて）先生と呼ぶな！」

圭太「ああもう、面倒だな。あのマスクド・スーパーティチャー。五百回は多すぎると思うけど」

富樫「まったくお前らは。あの全盛期の新日本プロレスは、毎日二千回のスクワットをやってたんだぞ。まあ、初日だから、そう

だな三百回にしておくか」

圭太「三百でも多いって」

富樫「つべこべ言うな！ 文句があるならかかってこい。俺は、誰の挑戦でも受ける！
それが俺のプロレスラーとしての信条だ。
文句無いな？ よし始めるぞ！」

と言って「一、二」と号令をかけながらスクワットを開始する。

× × ×

富樫が快調にスクワットを続けている。
へろへろになりながらも伊奈と伏見は、
なんとかついていっている。

他の生徒は砂の上に倒れている。

富樫「二百二、二百三！ どうした？ こん

なもんか？ 根性出せ！」

圭太、平井、純平が並んで倒れている。

平井「(息切れ)先輩、さっそく辞めさせてもらいます」

圭太「バカ。お前は、六十回で死んだ俺の倍は
はいつたろう。もっと頑張れ。それに(と

純平を見て）あいつはたったの三十回で死んだ」

純平はぐったりと動かない。

×

×

×

砂の上で全員がブリッジをしている。

富樫もブリッジをしながら、

富樫「いいか、ブリッジこそがレスリングの基本。これなくしてプロレスの技を受けることはできません！」

圭太「……こんな奴に顧問を頼むんじゃないかった」

純平は、奈々の隣でブリッジをしている。

純平「……く、苦しい。けど（奈々を見て）僕、幸せかもしれない」

○成塚家・全景（夜）

二階建ての一軒家。

○同・圭太の部屋

壁にはプロレスラーのポスター。

圭太がベッドの上で中学の卒業アルバム
を見ている。

今よりも、やや若い顔をした圭太と奈々。
何人かの男子生徒の写真が黒く塗りつぶ
されている。

苦い表情でアルバムを閉じ、筋肉痛を押
して立ち上がる。

圭太「痛え……」

筋肉もりもりのプロレスラーのポスター
の前に立ち、それを眺める。

圭太、腕立て伏せを始める。

○純平の部屋（夜）

ベッドの上に純平。奈々の写真を手に嬉
しそうにしている。ベッドの上には相当
な量の奈々の写真。そのどれもが隠し撮
りと思われる物ばかりだ。

純平「奈々ちゃん、俺、幸せ」

と写真にキス。

○富樫の住むマンション・全景（夜）
十階建てのマンション。

○同・富樫の家・リビング

富樫、ソファに座りプロレスの動画を観ている。

インタホンが鳴る。

立ち上がり、それに応える。

富樫「はい？」

奈々の声「北川です」

○同・玄関・外

本屋の紙袋を持った私服姿の奈々。

ドアが開き富樫が顔を見せる。

奈々「こんばんは」

富樫「あのさあ、こういう時間に……」

奈々「(かぶせて)いいから、いいから。はいこれ」

と本屋の紙袋を渡す。

奈々「今日発売のザ・プロレス。まだ買って

ないでしょう？」

富樫「(苦笑)買ってないけどさあ。こういうのまずいんだよ。こんな時間に、一人暮らしの教師のトコに女子生徒が来るとかさ。オレね、校長や教頭から散々釘を刺されてんの。くれぐれも女子生徒と問題を起こさないようにって」

奈々「(ニッコリ)二人だけの秘密にすれば、誰にもばれません」

富樫「あのさあ……」

奈々「(かぶせて)じゃあ帰ります。おやすみなさい！」

と言って帰っていく。

ため息をつく富樫。

○マンション・エントランス・外

奈々が走り出てくる。

富樫の部屋のあたりを笑顔で見上げ、

奈々「(大きく)よし！」

と叫んで走り出す。

○砂浜（放課後）

間逆になった平井の顔。

伊奈の股の間に挟まれている。ツームス
トンドライバー。

そのそばには圭太がいる。

伊奈「（圭太に）こんな感じか？」

圭太「そう。でも、頼むからそつと落とせよ」

平井「お願いしますよ。俺、首折れたら、速
攻で辞めますからね」

圭太「ていうか、お前が動いちやダメなんだ
ぞ。首を真つすぐ。プロレスは、技を受け
る側が大切なんだ」

伊奈、軽くジャンプして平井を落とす。

平井の頭が砂に突き刺さる。

圭太「お前、なにジャンプしてんだよ！ そつ
とやれって言ったろうよ」

伊奈「悪い。なんかテンションあがっちゃっ
てよ」

圭太、砂をかき平井を救出する。

平井「（弱々しく）俺の首、どうなってます？」

圭太「大丈夫。ちゃんとある！」

平井「良かった……」

純平の声「痛い！ 痛い！ ギブアップ！

ギブアップだから！」

見ると、伏見が純平にアームロックを掛けていている。

圭太「おい、ギブアップしてるんだから、技を解けよ！」

伏見「こいつ、簡単にギブアップしすぎだよ。」

これじゃあ技の練習にならん」

圭太「あのさあ、俺たちのやってるのはプロレスなんだから。あんまり本気になってもらったら困るんだよ」

伏見「お前は、そう言うがプロレスって何だ？」

圭太「だから……プロレスはプロレスだよ」

純平「(弱々しく)プロレスは芸術なの」

伏見「それは先生が言ってたやつだろうよ。」

あれ、正直いって、全然意味がわからなかったぞ。プロレスって何だ？」

圭太「いいから！ とにかくプロレスは、あ

んまり痛くしてもらったら困るんだ」

伏見「それにしたって（純平を見て）こいつは弱過ぎる！」

奈々と可憐が、離れた所から、圭太たちのやり取りを見ている。

奈々「ホントにこれ、柔道の役に立つのかな？」

可憐「立たないと思います。でも……別にいいんです」

と笑顔で伏見を見ている。

奈々、可憐の気持ちを察し、

奈々「なるほど、そういうことか。なんかいいね、そういうの」

可憐「はい。……でも、実は私もプロレスというものは良くわからなくて」

と言いながら一枚の紙を取り出す。

可憐「さっき純平先輩から渡されたんですけど、グレゴリオ祭では、こんな格好してくれないかって……」

奈々、その紙を見る。

そこには大会での二人のコスチュームが

描かれている。

二人ともスクール水着を着て、可憐は妙な腰蓑を巻いて棍棒を抱え、奈々は、女王様風の鞭を持っている。

奈々「なにこれ？」

可憐「こういうのをプロレスというのでしよ
うか？」

富樫の声「ふむ。なるほど悪くない」

振り向くと、そこに富樫がいる。

奈々「富樫先生！」

富樫「マスクド・スーパータイチャーだ。(見て)……まあ大会を開く以上、集客は大事だからな。女子レスラーがいるといたないとでは、客の入りが全然違う。だから、お前たちには期待してるぞ。無論、嫌なら無理強いほしくないが」

奈々「(キッパリ)やります！ あたし、昔から鞭に興味があったんです。可憐ちゃんも大丈夫だよ。このコスチュームで、大会出るよね？」

可憐「は、はい！」

富樫「そ、そうか。よし頼んだぞ」

と言って圭太たちを見る。

圭太たちは、水着を着て海に入り、ボディ
スラムなどの投げ技の練習をしている。

富樫「よし、俺もちよっくら、あいつらと
遊んでくるか！」

とジャージを脱ぎ捨て、水着姿になり、
圭太たちの所に飛び込んでいく。

それを嬉しそうに見る奈々。

可憐は、そんな奈々を見て、

可憐「なるほど、そういうことだったんです
ね」

○グレゴリオ学園・昇降口・上

生徒達が、昇降口の上にカウンタダウン
ボードを設置している。

それには「グレゴリオ祭まであと20日」
とある。

○同・校長室・中

校長の安田隆久（56）が席についている。

その脇に立つ教頭の木島正志（54）。

そして、その向かいに富樫。

木島「困るよ富樫君。プロレス研究会とかさ。

バカな大学生なら、何かあっても、自己責任で済むかもしれん。けど、ここは高校だよ。我々が責任を問われるんだよ」

富樫「しかし、教頭が我々の活動を認めたんですよ。グレゴリオ祭の参加団体の認証は、最終的に教頭の責任です」

木島「だから困つとるんだよ。私はプロレス研究会というのは、プロレスを研究して、その成果を模造紙か何かで発表するものだとばかり思ってたんだ」

富樫「（笑って）それ、どんなプロレス研究会ですか？」

木島「笑いごとじゃない！」

安田「でも、君はもう判を押しちゃったんでしょう？」

木島「はあ。しかし、もし事故でも起きたら、責任問題に発展するかと……」

安田「(富樫に)で、どうなの？ 事故は起きる可能性とかあるの？」

富樫「(キッパリ)起きません。自慢じゃありませんが、留年した二年を含めて、大学時代の六年間、一度たりとも事故を起こしたことはありません」

その時、突然ドアが開き、奈々が飛び込んでくる。

奈々「先生すぐ来て！ このままじゃ誰か怪我する！」

○砂浜

伊奈と伏見が顔を近付け、ガンを飛ばし合っている。

伏見「どうして柔道より空手の方が強いって言えるんだ？」

伊奈「掴まれる前に打撃を決めればいい。常識だろう？」

伏見「……お前バカだろ？」

伊奈「やってみるか？」

そこに圭太が割って入り、

圭太「お前ら、何やってんだよ。喧嘩とかすんなよ！」

伊奈「どけ！」

と圭太の鼻に裏拳を入れる。

鼻血を出す圭太。

戦いが始まる。蹴りを中心に伊奈が先行する。しかし、打撃をかくぐり伏見が、

伊奈を投げ、そのまま関節技へ。

そこに富樫がくる。

富樫「お前ら！ 何やってるんだ！」

と二人を引き離す。

伊奈「(興奮) 邪魔すんな！」

と富樫にハイキックを見舞う。

しかし、富樫はそれをかわして、伊奈を海に投げ込む。更に掴みかかってくる伏見のバックに回ってチョークスリーパー。

「参った」の意志表示をする伏見。

唾然とする圭太たち。

平井「先生、先生は、何かプロレス以外にも格闘技をやってたんスか？」

富樫「いや、俺はプロレス一筋だ。(大きく)いいか、よく聞け。極めればプロレスこそが最強の格闘技だ！」

木島の声「何が最強の格闘技だ！だね？」

見ると、そこに木島がいる。

木島「全員、校長室に来なさい」

○校長室

安田と木島に向かいあうように、富樫と

圭太たちが並んでいる。

鼻血を出している圭太。腕を痛めた伊奈。

伏見は、伊奈の打撃で顔が腫れている。

木島「なにが事故は起きませんでしたね。富樫くん、こうして怪我人が出てるじゃないか」

圭太「こんなの怪我のうちに入るかよ」

木島「なんだね？」

と厳しく圭太を睨む。

圭太「だから……こんなたいした怪我じゃないって言ってるんです」

木島「その口の利き方……。君は、三年五組の成塚圭太くんだったね？ 明応大学への推薦を希望している」

圭太「(少したじろぎ) だから何だよ？」

木島「口の利き方に気をつけなさいと言って
いるんだ！ どうやら君は推薦はいら
ないよ」

圭太「ちよつと待てよ！ いや……待って
くださいよ。それは、別の話でしょう？」

木島「いや、別の話ではない。君は、成績
の方は問題ないようだが、人物の方には、
相
当に問題があるようだね。これはちよつと
選考を考え直す必要があるな」

圭太「(小さく) 汚ねえ」

木島「なんだね？ いいか、よく聞きなさい。
ここは私立高校だよ。学校の方針を聞けな
いのなら、遠慮なく辞めて貰ってかまわな
いから！」

富樫 「いや、教頭先生、何もそこまで……校長、校長先生はどうお考えです？」

安田 「(うろたえ) いや、私は、怪我さえしないようにしてくれるなら、別に……」

木島 「(かぶせて) いけません！ 校長、甘すぎます。プロレス研究会は活動停止！ いいですね？」

富樫 「そんなあ」

奈々、困り果てた富樫の顔を見て、前に一歩進み出る。

奈々 「教頭先生」

木島 「なんですか？」

奈々、うつむいたまま何も話さない。顔をあげると、目から涙が溢れ出ている。

奈々 「教頭先生……」

木島 「(うろたえ) いや、君、何も泣かなくても……」

奈々 「あたしたちは、一生懸命練習してきました」

木島 「いや、それはわかるんだけどねえ」

奈々「今日だって、投げ技で怪我をしないように水着を着て海で練習するつもりでした。見てください！」

と言ってワイシャツのボタンをはずし、下に着た水着を見せる。

木島「（ゴクリ）いや、あの……君、そういうのはいかんよ」

と言いながらも視線は奈々の胸元に釘付けになる。

奈々「それにグレゴリオ祭に向けての準備も進んでいます。これが私たちの衣装です」

と奈々と可憐のコスチュームのイラストを見せる。

木島「ほほう、これはなかなか」

と好色そうな顔でイラストを見るが、

木島「いやいや、しかしだね……」

奈々「（かぶせて）お願いします！ もう絶対に怪我をしないようにしますから！ プロレス研究会の活動を許してください！」

と深々と頭を下げる。そして、見えない

ところで「みんなも頭を下げて」というように手で合図する。

全員、頭を下げ、

一同「お願いします！」

木島「いや、しかし、校長、どうします？」

安田「まあ、じゃあ気をつけるということ、

認めてもいいんじゃないかな」

奈々「(すかさず)本当ですか！　ありがとうございます

ございます！」

木島「いいんですか、校長？　後でいろいろ

と……」

奈々「(かぶせて)　ありがとうございます！

(振り返り)　みんなも校長先生と教頭先生

にお礼を言って！」

一同「ありがとうございます！」

気押される木島。

木島「ハハ、まあ、じゃあ、そういうことで。

以後、怪我をしないように気をつけて」

一同「(大きく)　ありがとうございます！」

○校長室・外・廊下

一同が、がやがやと出てくる。

圭太「いやあ助かった。北川、お前凄いな。

超演技派だな」

奈々「まあね。でも、みんな感謝してね。あ

と、もう喧嘩しないように」

伊奈「悪かった」

伏見「すまん。本当に迷惑をかけた」

歩き出す一同。

柴野「圭太、お前、明応に推薦決まってるのか？」

圭太「いや、まだ正式じゃない」

伊奈「お前、凄いな。超エリートだな。お前が頭良いなんて知らなかったよ」

圭太「そうか……？ まあ、確かに頭は相当にいいのかも（笑う）」

奈々、富樫に並びかける。

奈々「（小声で）良かったね、先生」

富樫「うん、まあ」

奈々「この貸しは、いつか返してくださいね」

富樫「(苦笑) そういうことを言うなよ」

奈々「楽しみにしてますから」

と言って、一瞬だけ富樫の手を握る。

後ろを歩く純平が、それを目撃する。

純平、激しくショックを受ける。

○成塚家・圭太の部屋(夜)

ベッドに寝転ぶ圭太。

階下から激しい口論の音が聞こえてくる。

圭太、部屋を出て、階段を降りる。

○階段下

圭太が降りてくる。

そこで妹の千夏(16)に出くわす。

千夏は、圭太に一瞥をくれると、そのまま

ま玄関に行き、家を飛び出していく。

千夏を追って母の郁恵(41)がくる。

郁恵「あっ圭太、お前、ちよっと千夏を追

かけて」

圭太「どうしたのよ？」

郁恵「どうしたもこうしたも、とりあえず追いかけて、捕まえてきてよ」

圭太「やだよ。千夏が、俺の言うことなんか聞くわけないだろ」

郁恵「そんなこと言ったって、あの子、高校辞めるって言うのよ。高校辞めて働くんだって。もう、何考えてるかわからないよ」

○住宅街の道（夜）

千夏を追って圭太が歩いている。

圭太「千夏、待てよ」

千夏「……（歩き続ける）」

圭太「待ってって！」

千夏、立ち止まり振り返る。

千夏「お兄ちゃん、この道歩いて平気なの？」

圭太「なんだよ、それ？」

千夏「この先のセブンイレブンの前、通れるの？」

圭太「なに……言っただよ？」

千夏「あたし知ってるよ、お兄ちゃんが駅か

ら帰ってくるとき、もの凄く遠回りしてるの。あの道、通りたくないんでしよう？」

圭太「……………」

千夏「梅本さんとかに会っちゃうかもしれないないもんね」

圭太「あいつのこと知ってるのかよ？」

千夏「知ってるよ。よく話するもん。お兄ちゃんの話もときどき出るよ。(吐き捨て)はつきり言って、超恥ずかしいよ。あんたの妹であることがさ！」

圭太「……………」

千夏「(笑って)じゃあね」

と歩き出す。しかし、途中で立ち止まり振り返る。

千夏「知ってる？　うちの両親、あたしたちが社会人になったら離婚するんだって」

圭太「はあ？　なんだ、それ？」

千夏「やっぱり知らないんだ。いいよね、のんきで」

圭太「どういうことだよ？」

千夏「だから、あたしは高校を辞める。だつて、あたしたちの為に続けたくもない結婚生活続けさせるなんて悪いでしょ？ お兄ちゃんも大学なんて行くのやめたら？ 早くあの二人を楽にしてあげようよ」と再び歩き出す。

圭太「……うそつけ」

○成塚家・台所

圭太と郁恵がいる。

圭太「はあ？ 父さんに聞いてって、どういうことだよ？」

郁恵「だから、そのまんまよ。その話はお父さんから聞いて」

と言って背を向ける。

圭太「……なんだよそれ。なんなんだよ？」

○グレゴリオ学園・昇降口・上

生徒がカウントダウンボードの日付を

「グレゴリオ祭まであと十四日」に変えて

いる。

○砂浜

練習をするプロレス研究会のメンバー。

柴野が、圭太を相手にブレンバスターの練習をしている。

しかし、なかなか圭太を持ち上げることが出来ない。

柴野「駄目だ。やっぱりブレンバスターは難しいな」

圭太「低くて回転の速いブレンバスターならできるんじゃないか。あれなら力は、そんなにいらないだろ？」

柴野「いや、それじゃ駄目だ。俺のやりたいのは、こう……高く持ち上げて、滞空時間の長い、格好いいブレンバスターをやりたいんだ」

圭太は、しみじみと柴野を見る。

柴野「なんだ？」

圭太「なんか、ブレンバスターに超思い入れ

がありそうだな？」

柴野「(照れて) いや、そんなことないよ。ただ、難しいからやってみたいんだ。その方が、できたとき、なんか格好いいだろ？」

圭太「うん、まあ練習ならいくらでも付き合うけど」

柴野「ところでさ、純平はどうしてるんだ？」

昨日も練習に来なかったろ？」

とたんに圭太の表情が曇る。

圭太「わからん。あいつ、最近変なんだよ。今日も、学校休んでるし。来てても、なんか暗いし。なんかあったのかな？」

○住宅街(夕方)

奈々が一人で歩いている。

そこに現れる純平。

純平「やあ」

奈々「栗原……くん。どうしたの、こんなとこで？」

純平「なんか偶然だね？」

奈々「うん……そうだね。じゃあ」
と歩き出す。

純平「(慌てて)あのさあ……あの、もし良
かったら、今度、どこかに遊びに行かない？」

奈々、困ったように微笑み、

奈々「いや……それはちよつと。ごめんね」
と言つて歩く。

純平、奈々の前に回り込んで、

純平「どうして？ 映画でも、遊園地でもど
こでもいいからさ。どこかに遊びに行こう
よ。ねっ？」

奈々「行かない。ごめんね」

純平「どうして？ 誰か、付き合ってる人と
かいるのかな？」

奈々「いるよ。だからごめんね」

純平「誰？ ひよつとして僕たちの知ってる
人だったりして」

奈々「そうかもね。良く知ってる人かも。最
近、付き合い始めたんだ。向こうが、あた
しのこと凄く好きみたい。だから、他の男

の子と遊びに行くとかありえないの。だから、ごめんね」

と再び歩き出す。

純平「その人とは、別れた方がいい」

奈々、立ち止まり、

奈々「どういうこと？」

純平「もつと……なんていうか、高校生らしいっていうかその……」

奈々、露骨に舌打ちをし、態度を変える。

奈々「なんなのあんた？」

純平「えっ？ いや、僕はただ……北川さんのために思って……」

奈々「ムカつくんだけど！ あんた、気持ち悪いよ。ようするに、あたしのことが好きなんでしょう？ 無いから！ 絶対に無いから！ あたしに彼氏がいようがいまいが、あんたと付き合うなんてこと絶対に無いから！ 悪いけど、二度と付きまとわないでくれる？」

と言って去る。

屈辱の表情の純平。

○グレゴリオ学園・三年五組・中（朝）

圭太が登校してくる。

教室内の様子がざわざわとしておかしい。

圭太「？ おい藤原、どうしたんだよ？」

藤原「おお圭太、お前んところにも来たか、メール？」

圭太「メール？ なんだそれ？」

藤原「来てないのか？ 結構みんなのところに
来てるみたいだけどな。まあ、見てみるよ」

とスマホの画面を圭太に見せる。

それには同じマンションに出入りする富
樫と奈々の写真や、運転席に座る富樫に
奈々が外から話しかけている写真などが
写っている。

圭太「（驚いて）これ誰が送ってきたんだ？」

藤原「知らないアドレスの奴。これ、二組の

北川奈々って女だろう？ 富樫と付き合っ
てるってことだな、これ」

その時、純平が登校してくる。

圭太「あっ純平！ 大変だ！ お前んところにもメール来たか？」

純平「……」

圭太「ちよつと見てみるよ」

と藤原のスマホを見せる。

純平「いいよ、興味無いから」

圭太「いいから見てみるよ！ 富樫と北川が付き合ってるみたいなんだ。大丈夫なのか、あの二人？」

純平「興味ないって言ってるだろう！」

圭太「……純平、お前、どうしたんだよ？」

その時、奈々が教室に入ってくる。

静まり返る教室内。

奈々、純平の前に立ち、

奈々「あんた最低！」

と言って純平をビンタし教室を出ていく。

圭太「お、おい、北川？（純平を見て）純

平……どういうことだよ？」

純平、鞆を持ち、教室を飛び出していく。

圭太「おい純平！ 待てよ！」

×

×

×

英語の授業。

圭太、まったく授業に身が入らない。

空いている純平の席をぼんやりと見る。

×

×

×

掃除の時間。

江口が教室に飛び込んでくる。

江口「おい！ 富樫がクビになったらしい

ぞ！ 超速攻！ やっぱ二組の女と付き

合ってたんだな」

圭太「……マジかよ」

○廊下

奈々が走っている。

○校長室前・廊下

奈々が走ってきて、そのまま校長室に飛び込んでいく。

○同・中

入ってきた奈々、そのまま安田の所まで突進していく。

奈々「(大きく) どうして富樫先生を辞めさせ
たんですか？」

○同・外・廊下

多くの生徒がドアに耳を当て、聞き耳を
立てている。

○同・中

奈々「何回同じことを言えばいいんですか。
あたしは、富樫先生と付き合っ
てはいませ
ん！ あたしが、ただ先生に付きま
とっ
ただけです。どうしてそれ
だけ
で、先生が
学校を辞めな
きゃなら
ないん
ですか！」

安田「いや、だからね、富樫先生に辞めて貰っ
たのは、それ
だけが理
由では
ないん
だよ」
奈々「じゃあ
なん
ですか！」

安田「聞きなさい！」

奈々「……借金？ そんなにたくさんあった
んですか？」

×

×

×

安田「（頷き）うむ。あまり言うべきことじゃないかもしれないが、学校の事務局に何度か取り立ての電話がかかってくるくらいにはあつた」

奈々「……」

安田「それに、今話したように女性問題やら繁華街でのトラブル。富樫先生には色々問題があつたんだよ」

奈々「そんな……」

安田「明るくて面白い先生だから、富樫くんが生徒から人気があつたのは知っている。けれど私は、今回の判断は正しかったと思っ
ている。私は、富樫くんと君との間に何も無かつたと聞いて、むしろほっとして
いるんだ」

○富樫の住むマンション・玄関・外（夕方）

奈々がインタホンを鳴らしている。

返事がないにもかかわらず、何度も何度もインタホンを鳴らし続ける。

スマホで電話をする。

メッセージ「おかけになった番号は、電源が

切られているか、電波の届かない……」

がつくりとスマホを切る奈々。

その時、突然スマホに着信がある。

奈々、慌てて出る。

○成塚家・圭太の部屋

圭太がスマホで話している。

圭太「あ、もしもし北川？ 成塚だけど。今

大丈夫？」

○富樫の住むマンション・玄関・外

奈々「(叫ぶ)大丈夫じゃないよ！ なに電話

とかしてきてんのよ！ あんたは全然関係

ないんだから、二度と電話してこないで！」

と電話を切る。

そして、壁にもたれたまま、ずるずると
床に座り込み、大声で泣きだす。

○圭太の部屋

圭太、茫然とスマホを見ている。

再びスマホを操作。

画面には栗原純平の名前。

圭太、純平に電話をかける。

呼び出し音が続くばかりで応答が無い。

圭太、ため息と共に電話を切る。

そして、意を決したように部屋を出て
いく。

○道路（夕方）

遠くにセブンイレブンが見えている。

圭太、セブンイレブンを避けるように、
そっと脇の細い道に入っていく。

○セブンイレブン・前

いかにも悪そうな梅本卓也（18）と中西

太陽（17）がたむろしている。

○奈々の自宅・玄関

「北川」の表札。

圭太が、奈々の母、皆子（42）と話をしている。

皆子「奈々はまだ帰ってきてないのよ」

圭太「ああそうですか。ありがとうございますいま
した」

○道路（夕方）

圭太が歩いている。

目の前に現れる梅本と中西。

梅本「何逃げてんだよ？」

圭太、卑屈に笑い、

圭太「逃げてないです。久しぶり」

中西「久しぶりじゃねえよ」

と圭太の腹を蹴る。

中西「毎月の小遣いどうなってんだよ？」

圭太「な、なんの話かな？」

後ろから梅本が蹴る。

梅本「とぼけんなよ。毎月、俺らに払うって約束した金だよ。何カ月も溜まってんだよ」

圭太「でも、僕、そんな約束してないし」

中西「ふざけんな！」

と圭太の財布を奪う。

圭太「ちよつと駄目ですよ」

梅本「(凄んで) ああ！ 何が駄目なんだ！」

圭太「い、いえ……」

中西「しよぼいな。五千円しかねえぞ」

その時、奈々が通りかかる。

梅本「北川！」

奈々「(暗く) ああ……梅本さんと中西くん。

久しぶり」

梅本「？ なんだよ、どうしたんだよ？ な

んか、らしくねえな。なんかあったのかよ？」

奈々「別に、なんにもないけど。じゃあね」

と歩き出す。

中西「待てよ。久しぶりに遊びに行こうぜ」

奈々「行かない」

梅本「なんだよ、冷てえなあ。なんかお前、
変わったな。グレゴリオ学園なんか行くか
ら、そんなになるんだよ」

奈々「大きなお世話だよ。こっちは、あんな
らみたくない悪いのから離れられてせいせい
してるんだからさ」

梅本「お前、そりゃあねえよ。昔は、散々一
緒に遊んだだろうよ」

中西「うちの中学から、グレゴリオ学園に行っ
た奴って他に誰がいるっけ？」

奈々「ここにいるじゃん」
とあごで圭太を示す。

奈々「まあ、全然関係ないけどね。じゃあね、
とりあえずだるいから帰るわ」
と言って歩きだす。

中西「なんだあいつ？」

○住宅街の道

奈々が歩いている。

後ろから圭太が追いついてくる。

圭太「北川」

奈々、振り向き、

奈々「なに？」

圭太「あの、なんて言っていていいか……その」

奈々「あのさあ、もうあたしに構わないでくれる？」

圭太「……？」

奈々「なんか、あんた見るとイライラしてくる。中学の時、さんざんいじめられてたくせして、高校では調子に乗って、いきがっちゃってさあ。言ったら悪いかと思って黙ってたら、調子に乗る乗る。高校デビューが恥ずかしいってわからないの？」

圭太「……」

奈々「もう、あたしには話しかけないで。少なくとも地元では絶対に！ あんたなんかといるとこ仲間に見られたら笑われちゃうからさ。じゃあね」

と歩き出す。

圭太は、何も言い返すことができない。

○純平の家・外観（夜）

「栗原」の表札。

○同・玄関・中

純平の母、佳代子（45）と圭太が話をしている。

佳代子「ごめんなさいね。純平は、話たくな
いそうなの」

圭太「でも、少しの時間でいいですから」

佳代子「（キツパリ）何があったか知らないけど、あたしは純ちゃんの味方だから。純ちゃんが、あなたに会いたくないって言ってるんだから、会わせるわけにはいかないの。
帰ってくれる？」

圭太「少しだけでもいいんです」

佳代子「お断りします！ 帰ってください！」

圭太、無言で靴を脱ぐと、むりやり佳代子の脇をすり抜け、あがりこむ。

佳代子「あなた、なんですか！ 警察を呼びますよ！」

○同・純平の部屋

純平が頭を抱え机に向かっている。

ドアの外から佳代子の叫び声が聞こえてくる。

ドアが乱暴に開く。

純平、ドアを見る。そこに圭太がいる。

純平「圭太……」

圭太「お前……何してんだよ？」

そこに佳代子が来て、

佳代子「(大声)なんなんですか、あなたは！

不法侵入ですよ！ 警察を呼びますからね」

圭太「(佳代子に)うるさい！ (純平に)富

樫は学校辞めちゃったぞ！」

純平「えっ？」

圭太「プロレス研究会も活動禁止になっ

ちゃったし。お前、自分が何をしたか、わ

かってんのかよ？」

佳代子が、圭太と純平の間に割って入る。

佳代子「帰ってください！ (純平に)純ちゃ

ん、相手しちやあ駄目よ！ 今すぐに警察

を呼びますからね！」

純平「うるさいよ！ 母さんは、あっち行つてくれよ！」

佳代子「……純ちゃん？」

圭太「なあ、純平！ お前、何やったんだよ！」

純平「うるさいな、関係ないだろ！」

圭太「関係あるよ！ ふざけんな！ お前、みんなに迷惑かけてんだぞ！ 最悪だな、お前！」

純平「なんだと！」

と言うと、圭太の胸倉を掴み、床に転がす。そして、馬乗りになり殴る。

圭太、抵抗するが、どうにもならない。

佳代子「純ちゃん、駄目！ 暴力は駄目！」

と純平にすがりつく。

純平「うるさいな！ あっち行けよ！」

と佳代子を突き飛ばす。

転がる佳代子。

純平、圭太を殴りながら、

純平「なに威張ってるんだよ、お前はさ。僕

は知ってんだぞ！ お前、中学の時、いじめられてたんだろ！なのに、なに調子乗って偉そうにしてき。お前なんか威張られる筋合い無いんだよ」

と言いながら圭太を殴る。

圭太は、何も反撃できない。

佳代子、純平にしがみつき、

佳代子「純ちゃん、やめて！ 暴力はダメ！
お願いだから純ちゃんやめて！」

○グレゴリオ学園・昇降口・上

カウンタダウンボードの日付が「グレゴリオ祭まであと7日」に変わっている。

○同・三年五組・中

生物の授業。

圭太は、授業に身が入っていない。

純平の席は空席のまま。

×

×

×

放課後。

圭太の所に江口が来て、

江口「圭太、今日、俺たちグレゴリオ祭の準備をするんだけど、圭太もやるか？」

圭太「どうすつか。しかし、あれだよな、喫茶店とか芸がねえよな」

ムツとした表情をする江口。

江口「そうか。そう思うんなら、さっさと帰れよ」

圭太「(慌てて)なんだよ。冗談だよ」

しかし、江口は他の仲間と教室を出ていってしまふ。

ポツリと教室に残される圭太。

○同・校門

圭太、一人校門を出てくる。

ふと海の方を見る。

○砂浜

圭太がくる。

柴野、伏見、柴野、平井の四人がプロレ

スの練習をしている。

伊奈、圭太に気付いて、

伊奈「よお圭太！」

圭太「なにやってんだよ、お前ら？」

伊奈「見りゃあわかるだろ。プロレスだよ」

伏見「圭太もやらないか？」

圭太「大丈夫か？ 学校がうるせえだろ？」

柴野「どうして？ 俺たちは砂浜でプロレス

ごっこをしてるだけだぞ。学校は関係ない」

伊奈「そうだ。別にグレゴリオ祭の参加団体

として活動してるわけじゃないぞ」

平井「先輩もやりましょうよ」

圭太「うーん（と考え）まあ、やめとくわ」

平井「えーマジすか」

柴野「まあ、それが正解かもな」

伊奈「そうだな。なにしろ明応大学の推薦が

かかっているんだから。つまらんことで棒に

振るのもバカらしいだろう」

圭太「いや……別に、そういうわけじゃない

けど」

○成塚家・圭太の部屋（夜）

圭太がベッドの上でぼんやりとしている
と、ドアからノックの音。

○同・外

扉の外に圭太の父、伸彦（44）がいる。

伸彦「俺だ。入ってもいいか？」

圭太からの反応は無い。

伸彦「（大きく）入るぞ」

と言ってドアを開けて中に入る。

○同・中

伸彦が入ってくる。

伸彦「郁恵から話は聞いた。俺たち夫婦のこ
とで話がある」

圭太、起き上がり、ベッドの上に座る。

○千夏の部屋・中

外から伸彦の「入るぞ」の声が聞こえて
くる。

千夏、立ち上がり、壁に耳を当てる。

○圭太の部屋・中

圭太「(大きく)はあ無職？ ていうか、いつ父さんは転職したのよ？ で、その会社が潰れた？ いつ？」

伸彦「転職したのは二年前。その会社が潰れたのは半年前だ」

圭太「俺、そんなの全然知らなかったよ」

伸彦「言っていないからな。子供に、わざわざそんなこと言う必要は無いと思ったんだ」

圭太「どうして？ 教えてくれよ」

伸彦「……郁恵は、俺の転職に反対した。給料は安くても、安定した会社の方がいいと言っただけ」

圭太「まあ、そう言うよ。だって潰れちゃったんだろう」

伸彦「それは結果論だ！ 俺だって家族の為に思って決断したんだ」

圭太「で、喧嘩して、その結果が離婚かよ？」

伸彦「いろいろあったんだ！ それだけが理由じゃない！」

○階段

郁恵が、そっと階段を昇っている。

そして二階の廊下に立ち、圭太の部屋に聞き耳を立てる。

中から圭太の怒鳴り声が聞こえてくる。

○圭太の部屋・中

圭太「(大声)だから、なんだかんだ言ったって、要するに離婚するってことだろうよ！ どうして話してくれなかったんだよ！」

伸彦「子供には、心配かけたくなかったんだ」

圭太「わけわかんないよ！ 子供には心配かけたくないとか言って、夫婦だけで話合って、それで喧嘩して離婚かよ！ 意味わかんねえよ！」

伸彦「……」

圭太「千夏は高校辞めるとか言ってるぞ！」

○千夏の部屋・中

千夏、壁に耳を当てている。

○圭太の部屋・中

圭太「俺だって大学行ってる場合じゃねえよ」

伸彦「大学には行け。貯金ならある。前の会社の退職金がまだ残っている。お前を大学に行かすことくらい金はある。千夏も、高校を辞める必要なんかない。あいつには、俺の方からよく言っておく」

圭太「そういう問題じゃないって」

伸彦「いいから大学に行ってくれ。……子供

が親に気を使う必要なんかないんだ」

圭太「じゃあ親も子供に余計な気を使わないで、なんでも教えてくれよ！ 家族ってさ、（大きく）家族ってもっと助け合うものなんじゃないのかよ！」

○千夏の部屋・中

聞き耳を立てる千夏。

○廊下

郁恵も、じつと聞き耳を立てている。

○グレゴリオ学園・昇降口・上

カウントダウンボードが「グレゴリオ祭
まであと6日」になっている。

○砂浜

圭太が砂に座り、ぼんやりと柴野たちの
プロレスごっこを見ている。

× × ×

大汗をかいて練習をする柴野たち。

ふと見ると、圭太がいない。

柴野「あれ？ 圭太はどこに行った？」

伏見「知らん。帰ったんじゃないのか」

柴野「まあ、そうだよな……」

と圭太のいた場所を見る。

○グレゴリオ学園・昇降口・上

カウントダウンボードが「グレゴリオ祭

まであと5日」変わっている。

○同・三年五組・中

ホームルームが終わり、生徒らが仲間と連れだって教室を出ていく。

圭太は、一人取り残される。

○砂浜

圭太がくる。

伏見が伊奈を相手に足関節の練習をしている。しかし、なかなかうまくいかない。

伊奈「なんだよ、柔道部のくせに関節技が出ないのかよ？」

伏見「柔道は、足関節は禁止なんだよ！」

伏見、圭太を発見して、

伏見「おお圭太！ いい所に来た。ちよつと足関節を教えてくださいよ」

圭太「(見て)……まずさ、位置がおかしいんじゃないか？」

伏見は、伊奈の左足を、右わきの下で抱

えている。

伏見「どういうことだ？」

圭太「だって、それじゃあ伊奈のあいてる足で、お前のことを蹴れるだろうよ。(伊奈に)ちよつと蹴ってみろよ」

伊奈、右足を伏見の顔に近付け、

伊奈「確かに蹴れるな」

圭太「だろ？ だから反対側から狙うんだ」

伏見「……？ どういうことだ？」

圭太「だから」

と二人に近づく。そして、左わきの下に、

伊奈の左足を抱える。

圭太「こうすれば、蹴られないだろ？」

伏見「なるほど」

伊奈「お前、俺の七色の蹴りを知らないようだな」

と無理やり右足で圭太を蹴ろうとする。

圭太、伊奈に密着して、

圭太「こうやって暴れてきたら体を近付けるんだ。そうすれば絶対に蹴れない」

と言いながら伊奈の左足を絞る。

伊奈「(叫ぶ) 痛てえ！」

伏見「なるほど、わかった」

と伊奈の右足に取りつく。

伊奈「てめえ！ 二対一は卑怯だぞ！」

圭太「柴野！ 平井！ お前らも伊奈に逆十

字決めてやれ！」

平井「おいす！」

柴野「よし、やるか！」

と伊奈の腕に十字固めを決める。

伊奈「てめえらふざけんな！ いくら俺が強

すぎるからって、四対一は反則すぎるだろ

うよ！」

と無茶苦茶暴れだす。

×

×

×

圭太たちは、砂まみれの汗まみれで息を切らしている。

伊奈「(圭太に) どうだ、久しぶりのプロレス

も悪くないだろう？」

圭太「(笑って) そうだな。なんか……いい

感じだ」

伊奈の荷物に、空手の打撃用のミットがある。

圭太、それを見て、

圭太「……なあ、俺にも空手の打撃を教えてくださいませんか？」

伊奈「おお構わないぞ。よし、早速やってみるか？」

圭太「えっ？ 今からかよ？」

伊奈「なんで？ やりたいんだろ？ だってやらろう。思い立ったが吉日だ」

× × ×

陽が沈みかけている。

圭太が、大汗をかいて伊奈の構えるミットにパンチや蹴りを放っている。

伊奈「よし！ そろそろ終わりにしよう。ラスト十本、中段蹴り、全力で来い！」

圭太「(息切れ) マジかよ？」

伊奈「(強く) いいから、やれ！」

圭太、全力の中段蹴りを連続で始める。

伊奈「(大声)一、二、三、四、五、六、七、
八、九、十！」

圭太、終わると同時に砂浜に倒れる。

伊奈「よし、よく頑張った！ 意外と根性あるな。見直したぞ」

圭太「(ゼイゼイ) 当たり前だ。俺を……俺を誰だと思ってるんだ」

伊奈「でも、気持ちいいだろう？」

圭太「ああ、確かに」

そこに可憐がくる。

可憐「あの？」

伏見「おお福島、どうした？」

可憐「あの、もし良かったら、あたしもまたプロレス研究会の練習に参加させてもらえないでしょうか？」

伏見「いやあ、お前はやめとけ」

可憐「どうしてですか？ あたしもプロレスをやりたいです。あたしだって、まだプロレス研究会の会員のはずです」

伏見「いや、違うんだ。まず第一に、これは

プロレス研究会の活動じゃなくて、単なるプロレスごっこだ。第二に、いくらプロレスをやっても、これが柔道の役に立つとは思えん」

可憐「そ、そんなことはないと思います。プロレスを学ぶということは、きっと柔道の役に立つと思います」

伏見「それはないだろう。柔道は柔道。プロレスはプロレスだ」

可憐「(しよんぼり) そうでしようか？」

伏見「そりゃあそうだよ。いいか？ 柔道は柔道着を着てやるんだ。これはもう、全然プロレスとは違う物で……」

圭太「(かぶせて) おい、お前は、何をわけのわからんことを言ってるんだ？」

伏見「何がわけわからんだ？ 福島に、柔道とプロレスの違いを説明してるんじゃないか」

圭太「そんなことは、可憐ちゃんは、とつくにわかってるよ」

伏見「なんで？ わかってないからこそ、プロレスの技を柔道に役立てるとか言ってるんだろう」

圭太「わかってないのはお前だ」

伏見「俺が、何をわかってないというんだ？」

クスクス笑い出す圭太たち。

伊奈「乙女心をわかってないって言ってるんだよ」

伏見「乙女心？ なんだそれ？」

爆笑する圭太たち。

圭太「いいから、とにかく可憐ちゃんを良く見てみるよ」

伏見、可憐を見る。

可憐は、真っ赤になってうつむいている。

伏見「えっ？ ……どういうことだ？ おい、まさか……」

と圭太たちを見る。

圭太「そういうことだ。やっと気がついたか」

伏見「(慌てて)おい待て。それは違うぞ。それは困る。俺は……俺は、痩せてる娘が好

みんなだ！」

と言ってしまったから、ハッと気がついて、慌てて可憐の顔を見る。

可憐の瞳に涙が一杯に溜まっている。

可憐「……ご迷惑をおかけしました。今まで、今までありがとうございます！ 失礼します！」

と頭を下げ、走り出す。

伏見「お……おい待て！」

しかし、可憐は行ってしまおう。

圭太の声「お前、最低」

伏見、圭太たちの方を見る。

皆、冷たい視線を伏見に向ける。

平井「今の、ひど過ぎないスか？」

柴野「もう少し言い方ってもんがあったん

じゃないかな」

伊奈「人として間違ってるぞ」

圭太「死ね！」

○グレゴリオ学園・昇降口・付近

カウンタダウンボードは「グレゴリオ祭
まであと2日」になっている。
段ボールを大量に抱えた生徒たちなど、
学園祭のムードが広がっている。

○砂浜

圭太が、ミットを構える伊奈を相手に空
手の打撃の練習をしている。

圭太、快調に突き、蹴りを打ち込む。

伊奈「なんか妙にスムーズだな。圭太、お前
家でも練習してるのか？」

圭太「まあな。まあ真似事だけど」

伊奈「だろうな。随分良くなったよ」

平井の声「(大声) おお！ あとちよっと！」

見ると、柴野が伏見を相手にブレンバス
ターの練習をしている。

体の大きい伏見を、かなり持ち上げられ
るようになってきている。

圭太「おお！ 柴野、お前凄いな！ あと少
しじゃないか！」

柴野「まあ、なんとなく伏見が協力してくれてるからな。そうじゃなかったら、絶対に持ちあがらないよ。ていうか、伏見に本気出されたら、俺なんか秒殺だろうけど」

圭太「まあ、そうだな」

と言った後、突然クスクス笑い出す。

伏見「なんだ？ なにがおかしい？」

圭太「今わかった。きつと、それがプロレスなんだ」

伊奈「どういうことだ？」

圭太「だから、プロレスっていうのは、ただ勝てばいいってもんじゃないんだ。お互いがお互いの良さを引き出して、技を受ける。みんなに見せ場がある。きつと、それがプロレスなんだ」

一同「(感心)なるほど」

圭太「ただ強いだけじゃダメ。だって、強い奴が勝つのなら、あたりまえすぎるだろ」

深く感心する一同。

圭太「それがプロレスだ。だから……だから

俺は、プロレスが大好きなんだ！」

平井「ヤバい。なんかちよつと感動してきた。

なんか、試合とかしたくないスか？ 俺、

試合がしたくなってきました。ねえ、先輩、

こうなったらグレゴリオ祭で大会開いちゃ

いましょうよ」

伏見「うん、そうだな！」

伊奈「よし、いっちょやってみるか！」

平井「ねえ、やりましょうよ！ 成塚先輩、

グレゴリオ祭で大会開きましょうよ！」

圭太「……（困り顔）」

平井「あれ？ 先輩、どうしたんスか？」

圭太「いや、ちよつと待て。それとこれとは

別だ。いくらなんでも大会はまずいだろ。

第一、今から許可が出るわけないし」

平井「もうシラけるな！ そんなもんシカト

すればいいじゃないですか！ ゲリラ的に

やっちゃえばいいんですよ」

圭太「いやいや、それはまずいだろ。そんな

ことしたら、後でいろいろと面倒なことに

なるって」

呆れた表情の平井。

平井「マジすか？ 乗りが悪いスね。それって要するに学校に睨まれたくないってことですよね。うわ最悪。そんなに明応の推薦が大切ですか？ あーやだやだ。一瞬でも先輩が格好いいと思って損した」

圭太「てめえ……この」

柴野「(大きく) いい加減にしろ！」

皆が驚いて柴野を見る。

圭太「柴野……」

柴野「お前、なに考えてるんだ！ 明応の推

薦は大切に決まってるだろ！」

平井「そうスカね？」

柴野「あたりまえだ！ うちの高校から明応に行けるなら誰だって行く！ お前に何がわかる！ 勝手なことばかり言うな！」

不貞腐れる平井。

圭太は、驚いた表情で柴野を見ている。

圭太「柴野……」

○英和堂書店・受験参考書のコーナー（夜）

圭太と柴野がいる。

柴野は、東大の赤本を読んでいる。

それを見て驚く圭太。

圭太「お前、マジか？」

柴野「ああ。でも現役で入ろうとは思ってないぞ。浪人は覚悟している」

圭太「けど、俺たちはグレゴリオ学園だぞ。過去にうちの高校から東大に行った奴なんていないだろ」

柴野「じゃあ、俺が最初の一人になる」

圭太「……なんか、格好いいな。一瞬、抱かれてもいいかと思った」

柴野、クスクス笑い、

柴野「俺、こう見えても、そこそこ頭はいいと自分では思ってるんだ。まあ、中学は休んでばっかだったから、内申が最悪でグレゴリオ学園くらいしか来られなかったけどさ」

圭太「なんで、学校休んでたんだよ？」

柴野「いわゆる『ぼっち』だったんだ。自慢じゃないが、三年間、殆ど学校で喋らなかつた。特に三年の時は凄いぞ。一年間で、クラスの奴と会話した記憶はゼロだ」

圭太「……」

柴野「だから東大に行きたいんだ。中学の時はボロ負けだったけど、人生長いからな。あいつらを驚かしてやりたいんだよ」

圭太「なんかわかるよ、それ。俺も、だから明応に行きたいんだ」

柴野「うん」

圭太「明応行けば、少しは自慢できるだろ。」

俺さ……俺も、中学の時、けっこう悲惨だったんだよ。いじめられててさ」

柴野「うん。だと思った」

圭太「(驚く)なんで？ 誰かに聞いたのか？」

柴野「誰にも聞いてないけど、そういうのつて、なんとなくわかるんだよ。特に俺みたいな奴にはさ」

圭太「ふーん、そうか」

と言ってからクスクスと笑いだす。

柴野「なにがおかしい？」

圭太「(笑って)おかしいよ。俺、一人で隠した気になってた。強気な振りしてさ。充実してます。友達一杯います、みたいな顔して。結局バレてたんだな。純平も知ってたよ。俺がいじめられてたこと。間抜けだよ。氣い張って損した」

柴野もつられてクスクス笑い出す。

圭太「知ってるか？俺、ニコ下の妹がいるんだけど、いじめられてるとこ、何度も中学の時、見られてるんだよ。悲惨だぞ、軽蔑されてさ。ロクに口もききやがらねえ」

柴野「まてまて悲惨さなら、俺も負けてないぞ。今思うと、なに考えてたかわからんだけど、俺、なぜか修学旅行に参加したんだよ。あれはキツイぞ。三泊四日、ひたすら口をきかないんだ。どうだ悲惨だろ？」

笑い合う二人。

他の客が呆れて圭太たちを見ている。

○工業団地（夜）

閑散とした夜の工業団地。

圭太と柴野が、じゃれるように、もつれるようにしながら走っている。

圭太「走りながら）おい、どこに行くんだよ？」

柴野「いいから！ こうなったら意地でも俺の方が悲惨だと証明してやる！」

○廃工場・正門・前

門が鎖で閉鎖されている。

そこに走ってくる柴野と圭太。

柴野、その前に立つ。

圭太「なんだ、ここ？」

柴野「父さんの勤めていた会社だ。一年前に潰れた。今はなんか、時給九百円くらいでバイトしてるらしい。どうだ、なかなか悲惨だろ？」

笑い出す圭太。

圭太「悪いな。うちの父親の会社も潰れたんだ。で今は無職。お互い悲惨だな」

柴野「……なんだ、そうか。(笑って) じゃあ引き分けてとこか」

圭太「うん」

と言つて暗い工場を見る。

柴野「まあ、大人もそれなりに大変なんだろうけどさ、子供だって結構大変だよな？」

圭太「いや、むしろ子供の方が大変だと思うぞ。まあ、大人の方は良く知らんけど」

笑い合う二人。

柴野「……でも、大学には行けつて言うんだ。金無いのに。大学、行きたいなら行けつて言うんだ」

圭太「うちもだ」

柴野「……だから、俺は大学に行く。きつと俺たちは、まだ子供でいいんだよ。余計な心配しないで、子供やってられるうちは子供でいいんだと思う」

圭太「(笑って) そうだな。……うん、ホントそうだ。よし、俺も大学に行こう」

○圭太の部屋（夜）

圭太が、プロレス研究会の勧誘に使ったポスターをじっと見ている。

○グレゴリオ学園・昇降口・付近

カウントダウンボードは「グレゴリオ祭まであと一日」になっている。

準備に奔走するたくさんの生徒たちの姿。

○進路指導室・中

圭太と担任の小林秀志（38）が面談をしている。

小林「……まあ、成績の方は問題ないな。あるとすれば、お前自身の方だ」

圭太「……」

小林「問題を起こすなよ。毎年、グレゴリオ祭の後に打ち上げとかして、酒飲んで、警察に補導されたりする奴が必ず出てくる。そうになったら推薦は取り消しだぞ」

圭太「……」

小林「？ お前、人の話聞いてるか？」

圭太、壁の時計を見る。

三時四十分。

圭太、突然立ち上がる。

小林「おい、成塚、どうしたんだ？」

圭太、無視して窓際に行き、窓を開ける。

眼下に、砂浜に向かう柴野、伊奈、伏見、

平井の姿が見える。

小林「(怒って)おい、成塚！ 今は面談中だ

ぞ！ 席に着け！」

圭太「(大声で) おおい、みんな！」

と手を振る。

柴野たちが圭太に気付く。

圭太「大会を開こう！ グレゴリオ祭で大会

を開こう！ やるか？」

柴野「やるぞ！ 圭太がやるならやるぞ！」

圭太「やる！ やるぞ！ 俺はやるぞ！」

伊奈「よし、やろう！ じゃあ早く降りてこ

いよ！」

圭太、振り向いて小林に、

圭太「先生、俺、推薦いらさないや。一般で受験する」

小林「はあ？ お前、自分が何を言ってるのかわかってるのか？」

圭太「ていうか、どうせ推薦取り消しだから。俺、これから問題起こすから。その方が、いろんな意味で先生も楽でしょう。それじゃあ！」

○砂浜

圭太、柴野、伏見、伊奈、平井がいる。

圭太「本当にやるな？ お前ら、覚悟はできてるな？」

柴野「もちろん。ていうか、圭太こそ、本当にいいのか？」

圭太「(キツパリ)いいんだ。俺も一般で受験する。俺も、こう見えて地頭はいいんだ……たぶん。とにかく俺のことは気にしないでくれ！」

柴野「そういうことならやろう。俺も、特に

学校を気にする必要なんかない」

伏見「俺は、もう就職先が決まってるからな。

まあ、うちの会社だけだ」

圭太「ていうか、お前、将来の社長なんだろう？」

伏見「そうだ。もし仕事に困ったら、俺の所にこい。雇ってやるぞ」

伊奈「俺は、進学っていつでも東京の専門学校だからな。学校なんて、気にする必要はない。選ばなければ専門学校なんていくらでもあるしな」

圭太「お前が、なんの専門学校に行くんだ？」

伊奈「(キツパリ) ITだ」

圭太「お前が」

柴野「IT？」

伏見「笑わせるな！」

平井「似合わなすぎ！」

伊奈「言ってる。まあ、実際は、東京に行ければ、なんでもいいんだ。俺の本当の目的は、東京のジムに通って、プロの格闘家に

なることだから」

圭太「マジで？」

伏見「おいおい、俺に勝てない奴がプロの格

闘家とか無理なんじゃないか」

伊奈「俺が、いつお前に負けた？」

向かい合う伊奈と伏見。

圭太、間に入り、

圭太「やめとけて。じゃあ、それも異種格

闘技の試合っていうことで、明日決着をつ

けよう。とにかく準備が先だ！」

伊奈「そうだな」

伏見「異存はない」

圭太「よし！　じゃあ準備に入ろう！」

○道路

リング作りのための資材を運ぶ圭太たち。

ふと見ると、可憐が公園に木の陰に隠れ

て、こちらを見ている。しかし、その木

は細く、可憐の体をまるで隠していない。

圭太「（伏見に）おい、可憐ちゃんがいるぞ」

伏見「ああ」

圭太「この前のこと謝ってこいよ」

伏見「……ああ」

と言ったまま動かない。

圭太「何してんだよ？ 早く行け。ていうか、

可憐ちゃんは、あれで結構可愛い顔してるぞ。もし痩せたら、相当に可愛いような気がするぞ」

と冗談ぼく言う。

伏見「(大真面目に) ああ、俺もそう思う」

驚く一同。

圭太「えっ、マジ？」

柴野「ひょっとして伏見、可憐ちゃんのこと……」

伏見「ああ、どうやら俺は、福島可憐のことが好きみたいだ」

一同「マジで？」

伊奈「だったら、なおさら、この前のことを謝ってこいよ」

柴野「そうだよ。今行かないと後悔するよ」

圭太「さっさと行ってこい！」

伏見、可憐の元に向かう。

可憐、慌てて逃げ出していく。

伏見「おい待て！ 福島！ おい待て！」

○砂浜

走ってくる可憐。

伏見が追いついてきて可憐の腕を掴む。

伏見「福島待て。この前のことは謝る」

可憐「いいんです、別に。あたしが、一人で勝手に盛り上がったただだから。先輩は、悪くありません。だから、謝ったりしないでください」

伏見「そんなことない。俺が悪かった」

可憐「……いいです。けど、あたし、もう柔道辞めます。（泣いて）あたし、先輩がいたから、柔道頑張ってたけど……もう柔道やっても意味ないし」

伏見「そんなこと言うな。続けろよ」

可憐「（首を振り）辞めます。あたし、柔道辞

めて痩せるんです。痩せて綺麗になって、
伏見先輩を……伏見先輩を後悔させてや
るんです」

伏見「そんな必要はない。お前は、今のまま
で十分に可愛いじゃないか」

可憐「……そんなお世辞はいいです」

伏見「お世辞じゃない。お前は本当に可愛い。
俺が間違ってた。だから柔道が続けてくれ。
お前ならオリンピックにだって出れる。だ
から、柔道が続けてくれ」

可憐「別にオリンピックなんて興味無いです。
別にオリンピックや日本の為に柔道をやっ
てたわけじゃないから……」

伏見「だったら俺の為に柔道が続けてくれ！
はつきり言う。俺は、お前のことが好きだ！」

可憐、驚いた表情で伏見を見る。

可憐「……嘘だ」

伏見「本当だ。あれから良く考えてみたんだ。

俺は、お前のことが好きだ。たった一人の
女子柔道部員として練習して、全国大会ま

で行く。そんなお前を、俺は尊敬するし、大好きなんだ。だから柔道を続けてくれ」

可憐「…………う、嘘」

伏見「本当だ。俺は、お前のことが好きだ。

一緒にオリンピックまで頑張ろう。いや、オリンピックが終わってからも一緒だ。ずっと…………ずっと一緒にいよう」

可憐「(泣く)先輩…………」

伏見「どうしても痩せたいのなら、オリンピックが終わってからだ。(微笑んで)痩せたお前は可愛いだろうな」

可憐「先輩！」

伏見、可憐を抱きしめる。そして二人は長いキスをする。

それを、遠くから圭太たちが見ている。

圭太「マジか、この展開？」

伊奈「伏見と可憐ちゃんのキスシーンを目撃するとは」

平井「でも、ちょっと羨ましいです」

柴野「うん、確かに」

平井「先輩たちは、キスの経験とかあるんですか？」

圭太・伊奈・柴野「……」

平井「マジすか。情けな……」

伊奈「そういうお前はどうなんだ？」

平井「(キツパリ) もちろん無いス」

笑い出す一同。

柴野「でもまあ、可憐ちゃんも戻ってきたし、

良かったじゃん」

圭太「そうだな」

と言いながら考え込む。

圭太「(柴野に) 悪い。ちょっとリング作り、

みんなに任せていいか？」

柴野「いいけど。圭太は、どうするんだ？」

圭太「メンバー集めしてくる。どうせなら、

みんなで大会開きたいからな！」

○成塚家・圭太の部屋

圭太、スマホを耳に当てている。

メッセージ音声「お客様がおかけになった番

号は、電波が届かない所にあるか……」

圭太、舌打ちをして携帯を切る。

○同・廊下

圭太が部屋から出てくる。

階段を上がってきた千夏と出くわす。

圭太「千夏、俺、大学に行くぞ」

千夏「それで？」

圭太「しかも間違いなく浪人する。だから、少なくとも五年間は、俺は社会人にはならない」

千夏「……だから？」

圭太「だから、あと五年間は、うちの親は離婚しない。お前が高校辞めても意味は無い。

高校に行け」

千夏「そんなの意味無いよね？ ただ問題を先送りしただけだよ」

圭太「俺は、先送りが悪いとは思わない。五年の間に父さんたちの考えが変わるかもしれないだろ」

千夏「(嘆息) それはないと思う」

圭太「だとしてもだ。五年の間に、俺たち方の考え方や、物の見方が変わるかもしれない。だから、先送りが悪いやり方だとは思わない」

千夏、不思議そうな顔で圭太を見る。

千夏「どうしたの？　なんか変だよ？」

圭太「なにが？　とにかく、千夏が高校辞めても意味は無い。高校くらい卒業しとけ」

千夏「わかった。とりあえず話は聞いとくよ」

圭太「(笑って) よし！」

と言って階段を駆け下りていく。

千夏「なんだ、今の？」

と言いながらも嬉しそうに圭太の後ろ姿を見送る。

○道路（夜）

遠くにセブンイレブンが見える。

圭太、一瞬ためらうも、意を決したように脇道に入らず、直進していく。

○セブイレブン・前

梅本と中西がたむろしている。

足早に圭太が通り過ぎる。

梅本「(大声) 成塚！」

圭太、無視して歩き続ける。

梅本「野郎！ シカトしやがった！」

と立ち上がり、中西と共に追う。

○道路

圭太に、梅本たちが追いついてくる。

梅本「てめえ、なに逃げてんだよ？」

圭太「あ？ 悪い、急いでるんだ」

中西「(ムカッ) おい、お前、誰に口きいてんだよ？」

圭太「なんだよ、うるせえな！ お前ら、い

つまで中学校の学区の中で威張ってんだよ。

少しは成長したらどうだ！」

梅本「なんだと！」

と圭太に殴りかかる。

圭太、かわして梅本の鼻にパンチ。

鼻血を出してうづくまる梅本。

圭太「あれ？ お前ら弱いのか？」

喧嘩。

圭太、突き蹴りを放って良く戦うが、次第に押されてくる。

圭太「負けるか、バカ！」

と中西に頭突きを入れてから、背後に回りバックドロップ。

中西、かろうじて後頭部から落ちることを逃れる。

震える中西。

中西「てめえ、殺す気か！」

梅本「危ねえだろ！」

圭太「はあ？ 危ないもクソもないだろ！ お前らがちよっかいかけてきたんだろが！ 覚悟しとけ。俺は本気だぞ。これ以上、俺にちよっかいかけてくるなら、死ぬ気でこい」

梅本「……お前、頭おかしいのかよ」

その時、近所の住人、菅井忠司（44）が

出てくる。

菅井「こらあガキども！ なにしてるんだ！」

中西「(梅本に) おい、行こう」

と言って走り出す。

菅井「(圭太に) 君、大丈夫か？」

圭太「(笑って) 大丈夫です。なんか、やってみると、意外とチョロイってことあるんですね？」

菅井「……何を言ってるんだ、君？」

○奈々の家・玄関（夜）

圭太と皆子が話している。

皆子「ごめんなさい。奈々はいないのよ。(心配顔)

あなた、どこか心当たりない？」

圭太「……じゃあ、少し、探してみます」

○富樫の住むマンション・玄関・中（夜）

富樫がドアを開ける。

ドアの外には奈々。

富樫「よお、久しぶりだな？」

奈々「(笑顔) 良かった、やっと会えた」

富樫「まあ、あがれよ」

奈々「(喜ぶ) ホントに？ ホントにあがって
いいの？」

富樫「いいよ。一度くらい。まあ、あがれ」

奈々「おじやましまーす！」

○同・リビング

奈々が茫然としている。

荷物が、段ボールに梱包され、明らかに
引越しの準備である。

奈々「……引越しするの？」

富樫「ああ」

奈々「どこに？」

富樫「(笑って) まあ、言う必要は無いだろ。
お前も知らない方がいい」

○同・マンションの前

圭太がやってきてマンションを見上げる。

○富樫の部屋・リビング

奈々「やっぱり、あたしに怒ってるの？」

富樫「いや、そんなことはない。いずれにしろ俺は教師には向いてなかったんだ。まあ、気にすることはない。俺のことは忘れろ」

奈々「忘れられないよ。……あたしは、これから先生に会いたい」

富樫「無理だ。勘弁してくれ」

その時、インタホンが鳴る。

富樫「(出て) はい？」

圭太の声「成塚です」

○同・玄関・外

圭太がいる。

ドアが開き富樫がくる。

富樫「よお、お前も来たのか。まあ、あがれ」

圭太「？ おじやまします」

○同・リビング

やってきた圭太、奈々の姿を見て驚く。

富樫「(圭太に) 何の用だ？」

圭太「あ……明日のグレゴリオ祭で大会を開くことにしたんだ。ゲリラ的にだけど。それで、先生にも出て貰えないかと思って。

あと、もちろん北川にも」

富樫「(笑って) さすがに俺は無理だ。いくら俺でも、辞めた学校に、のこのこ顔は出さなんてできん。(奈々に) でも、北川は出ろよ。きつと楽しいぞ」

奈々「いいよ、そんなの。出ても意味無いし」

富樫「どうして？ こうして誘ってくれてるんだ。出たらいいじゃないか」

奈々「(キレて) そんなの出るわけないじゃん！ (泣きだす) あたしは先生がいたからプロレスをやったの！ 先生がいないのにプロレスなんかやるわけないじゃん！ あたしは、先生が好きなの！」

富樫「……まあ、無理なものは無理だ。あきらめろ」

その時、「なんか青春してるね」という女

性の声が聞こえてくる。

見ると、藤崎かおる（30）が、リビングの入口に立っている。水商売風の派手な衣装と濃い化粧。

富樫「よお、かおる」

かおるは、富樫家の合鍵と思われる鍵をわざとらしく奈々に見せつけ、

かおる「（富樫に）なにあんた、こんな若い子にも手を出してるの？」

富樫「（苦笑）出すかよ。わけのわからんことを言うな」

かおる「まあ、別れたかったら、別れてあげてもいいけど、その時は、貸してあげたお金返してね。三百万……あれ、四百万だったっけ？」

富樫「そういうことを言うな」

かおる、富樫に小さな紙袋を渡し、かおる「買ってきたよネクタイ。うちのパパの好み。それしてけば、面接はバッチリうまくいくと思うよ」

富樫、袋を開けながら、

富樫「(圭太に)俺、明日、就職の面接を受けに行くんだよ」

かおる、圭太と奈々をじっと見て、

かおる「あたしのパパの会社。パパっていったって愛人のパパって意味じゃないよ。本当のお父さんのパパ」

と言って「キャハハ」と下品に笑う。

富樫が、袋からネクタイを取り出す。鶴と亀がデザインされた趣味の悪い代物。

かおる「パパはさ、地味なデザインのネクタイが大っきらいなの。ストライプのネクタイしてる奴にロクな奴はいないんだって」

富樫「……」

かおる「良かったね、直樹。これで、将来は、うちの会社の社長だよ。高校の先生なんかやってるより、よっぽどいいよ」

と言って、富樫にしなだれかかる。

富樫、ため息をついて、

富樫「(圭太と奈々に)まあ、こういうことだ」

奈々、部屋を飛び出していく。

圭太「おい！ 北川、ちょっと待てよ！（富樫を見て）先生！」

富樫「……成塚、お前も、もう帰れ」

圭太、玄関に行きかけるが、振り向き、

圭太「先生、あしたの大会、本当に駄目なの？」

富樫「（嘆息）言っただろう？ 明日、就職の面接なんだよ」

圭太、部屋を出ていく。

かおる「なんか、ホント青春で感じ」

と富樫にキスする。

○シャッターの閉まった酒屋・前（夜）

奈々がシャッターを蹴飛ばしている。

店の中から「誰だ！」の声。

圭太が来る。

圭太「バカ！ 何やってんだよ！」

と奈々の手を引いて走り出す。

○小さな公園（夜）

圭太が奈々の手を引きやってくる。

奈々「離してよ！」

と圭太の手を振りほどき、歩き出す。

途中で公園の看板にパンチを入れる。

圭太「おい、怪我するぞ」

奈々「うるさい！」

と言って再びパンチ。

圭太「……じゃあ、殴るんだったら、ここを殴れよ」

と両手のひらを差し出し構える。

圭太「最近、伊奈から空手の突きを習ってるんだ。こう……ワン、ツーからフックみたいな」

とパンチの動作を試みる。

奈々、言われた通り、圭太の手のひらにパンチを入れてみるが、二、三度やっただけで、すぐにやめてしまう。

奈々「こんなのつまんないよ」

圭太「……そうか」

奈々「手のひらなんか殴ったって」

圭太「じゃあ、どこならいいんだよ？」

奈々「ここ」

と圭太の胸のあたりを指さす。

圭太「マジ？」

奈々「嫌なの？」

圭太「……じゃあ、いいよ。殴れよ」

奈々、圭太の胸や腹にパンチを入れる。

圭太、痛い在必死に耐える。が、

圭太「ちよちよちよつと待つて！ 痛すぎる

から、やっぱダメ。別のなんかにしよう」

と奈々の顔を見る。

奈々は、ボロボロと涙を流している。

圭太「……やっぱり、もうちよつと殴つても

いいよ」

奈々、再び圭太のボディを殴り始める。

奈々「なんか……あたし、もの凄い格好悪い

ところ見られてるよね？」

圭太「気にすんなよ。中学の時の俺の方がよっ

ぽど格好悪いって。俺が、廊下を全裸ダッ

シュされられたのとかおぼえてるだろ。あ

れに較べれば、よほどまし。すぐに忘れられるよ」

奈々「……うん」

殴り続ける奈々。

大げさに痛がる圭太。

奈々の顔に徐々に笑顔が拡がっていく。

圭太「(大きく) 痛え！ ちよつと待って！ やっぱ痛いって！」

奈々「(笑って) もお！ せっかく立ち直りかけたのに。もう少し殴らせてよ！」

圭太「頼むから勘弁して。わかった、面白い話するから、それで勘弁して。絶対に笑える話するから」

奈々「マジで？ そんなハードルあげて大丈夫なの？ 面白くなかったら、超本気のパンチ入れるからね」

圭太「大丈夫。(咳払いをして) 富樫先生の彼女ってさ……」

奈々「うん」

圭太「ケバくね？」

嘔き出す奈々。

奈々「うん。ケバかった」

圭太「なあ、ありえないよな」

奈々「うん、ありえない。あの服のセンスとか、なんなんだろうね？」

圭太「あのネクタイ、何だったの？　なんか変な絵みたいのが描いてなかった？」

奈々「(笑って)なんか鶴と亀が描いてあった。信じられないよ。あんなネクタイしてる奴なんて絶対ヤダ！」

ひとしきり大笑いする二人。

圭太「な？　面白かったろ？」

奈々「(ニッコリ)うん。ありがと」

○純平の部屋

座卓の一方に圭太と奈々、その反対側に純平が座っている。

純平「……僕は、とんでもないことをしてしまつて。みんなにも……(奈々を見て)それに北川さんにも、本当に申し訳なくて」

奈々「(ニッコリ) もう、いいよ」

圭太「そうだよ。もう終わったんだ。明日、みんなでプロレスやろう」

純平「……ダメだよ。僕は、みんなにあわす顔が無い。僕抜きでやってくれよ」

圭太「(真面目に)……ダメだよ。純平抜きじゃ絶対にダメなんだ」

純平「……」

圭太「俺、お前に感謝してるんだよ」

純平「……どうして？」

圭太「だって、プロレス研究会やろうって言い出したの純平だろ？ 最初は嫌そうなふりしてたけどさ……ホントは凄く嬉しかったんだ。……だって、俺にはなんにも無いから」

純平「無いって……何が？」

圭太「なんか……こう、高校時代の思い出みたいなのが。考えてみると、俺、なんにも無いんだよ」

純平「……」

圭太「俺、中学の頃が悲惨だったから、高校じゃ頑張ろうと思って……。いろいろ楽しそうなふりしてたけど、考えてみると、なんにも無いんだよ。『高校時代にバカやっちゃってさあ』みたいな、くだらなくて、バカバカしくて楽しい思い出がさ。俺、なんにも無いんだよ」

純平「圭太……」

圭太「だから、純平にプロレス研究会やろうって言われた時は嬉しかった。だってバカバカしいだろ？ 高三の二学期になって急にプロレス研究会作るなんて。最高にくだらなくて……。最高にバカみたいで……。最高になんて言うか、こう……」

圭太の瞳から涙がこぼれる。

圭太「最高に楽しいだろう？ 純平のおかげだよ。だから、一緒にやろう。純平がいなくちゃ駄目なんだ。お前無しじゃ始まらないって」

奈々、純平の手に、自分の手を重ね、

圭太「ああ」

と言って空を見上げる。

夜空に星が輝いている。一筋の流れ星。

○グレゴリオ学園・校門付近（翌朝）

「グレゴリオ祭」と大書きされた看板。

続々と客が校門をくぐっていく。

○体育倉庫・中

平井がスマホを構え記念撮影。

ファイティングポーズをとる圭太たち。

平井「はい、チーズ」

と言ってシャッターを押す。

柴野「じゃあ、今度は俺が撮るよ」

別のポーズで更に一枚。

伊奈「よし！ じゃあ、そろそろ行くか！」

圭太、自分のスマホを柴野に渡し、

圭太「柴野、悪いけど、これで、もう一枚撮っ

てくれないか？ 俺と北川のツーショット

で。（奈々に）北川、一緒に写真を撮ろう」

奈々「うん」

圭太と奈々、二人でファイティングポーズをとる。

柴野「はい、チーズ」

と言ってシャッター。

圭太「サンキュー」

とスマホを受け取り、なにやら操作する。

圭太「(呟く) これでよしと……」

そして、全員に向き直り、

圭太「(大声で) よし、そろそろ行くか！ 最

初で最後の大会だ！ みんな、気合い入れ

ていこうぜ！」

一同「おう！」

○富樫の部屋・リビング

スーツ姿の富樫がスマホを見ながら爆笑している。

富樫「まったく、あのバカは。どうしようもないな」

画面には、圭太が送ってきたファイティ

ングポーズをとる圭太と奈々の写真。
そして、その下に「誰の挑戦でも受ける
んじゃなかったの？」とのメッセージが
添えられている。

富樫、鏡に映った自分の姿を見る。

視線の先には鶴と亀がデザインされた
ネクタイ。

富樫、首を振り、深いため息をつく。

○グレゴリオ学園・リング

奈々が、純平にローキックを浴びせま
くっている。

盛り上がる満員の観客。

リングサイドに机を置き、そこで圭太と

平井が解説と実況をしている。

平井「おおっと女王様北川、怒りのローキッ
ク連発だ！ ストーカー栗原、まったく反
撃できません！」

圭太「ていうか、ストーカー栗原は、ちよっ
と喜んでると思いますよ。なにしろ彼は、

ドMですから」

×

×

×

伏見・可憐対柴野・平井のタッグマッチ。

伏見と可憐は、どんな攻撃もツープラトンである。

実況は圭太と伊奈。

伊奈「さすがは愛のバカップルコンビ、何をやるのも一緒だ！」

圭太「(爆笑)それにしても貧弱コンビは弱すぎる！ なんにもできません！」

リング上では、平井がフラフラである。

平井「……先輩、もう勘弁してくださいよ」
伏見「お前、今、可憐の胸に触らなかつたか？」
平井「いや、でも、今はプロレスやってるんですから」

その瞬間に伏見、平井に強烈なビンタをくらわす。

×

×

×

リング上は圭太と柴野のシングルマッチ。

柴野、ブレンバスターの態勢に。

柴野「いくぞ、圭太！」

圭太「おお」

柴野、圭太を高く持ち上げる。

長い滞空時間。そこから圭太を投げ捨てる。カウンスリーで柴野の勝利。

立ち上がり、握手をする圭太と柴野。

圭太「いいブレンバスターだったよ」

柴野「ありがとう。なんか自信がついたよ」

○グラウンドに向かう道

安田と木島がリングに向かっている。

しかし、大量の観客に阻まれ、前に進めない。

木島「(叫ぶ) 君たち、道を開けなさい！」

しかし、道はできない。

木島「まったく、校長、どうします？」

安田「……仕方がない。神に祈ろう。事故な

く、無事に終わるように」

木島「は？ 何ですって？」

安田「神に祈ろうと言っているんだ」

と言って十字を切り、祈る。

安田「……木島くん、君も祈りなさい」

○リング

伊奈と伏見のガチンコ対決。

伏見が、完璧な腕ひしぎ逆十字を決めて
いる。

実況は圭太と平井。

平井「柔道対空手のガチンコマツチ、腕ひし
ぎ逆十字が完璧に決まった。これはギブ
アップしかないだろう！」

しかし、伊奈はギブアップをしない。

平井「(不安)……大丈夫なのか？ ギブアッ
プをした方がいいような気がするぞ！」

圭太、立ち上がりリングサイドへ。

圭太「伊奈！ ギブアップしろ！」

伊奈「誰がするか。(伏見に)折りたきや折れ」

奈々もリングサイドにくる。

奈々「伊奈くん、ギブアップして！ 負けを
認めることは別に恥ずかしいことじゃない

でしょう！ 練習して、次に勝てばいいんだから！」

圭太「そうだ！ いつだって次がある。練習して、もっと強くなればいいんだ！」

伊奈、諦めたように、ギブアップをする。

大歓声。

伊奈「覚えとけよ。東京で、死ぬほど練習して、メチャメチャ強い格闘家になってやるからな」

伏見「期待してるぞ。デビューが決まったら、連絡してくれ。必ず、東京まで応援に行く」

二人でがっちり握手。

圭太の視線が、観客の最後尾に釘付けになっっている。

そこには、上半身裸でプロレスのマスクをかぶった富樫がいる。

圭太「(大声) 柴野！ 悪い、特別にもう一試合やろう！」

柴野「いいけど、カードは？」

圭太「変則タッグマッチ。俺と北川がペア。

相手はマスクド・スーパーテイチャー！」

柴野「？ マスクド・スーパーテイチャーって、富樫先生のことじゃあ……」

柴野も、圭太の視線を追い、富樫を発見する。

柴野「わかった。やろう」

奈々も富樫をじっと見ている。

圭太「(奈々に)もし嫌だったら、俺一人で戦うけど」

奈々「(キツパリ)ううん、やる！ 大丈夫、もう全部思い出しただから。でも、ちよつとムカつくから、軽くあのおっさんをシバいてやる」

圭太「(笑って)よし、やろう！」

× × ×

リング上で対峙する圭太・奈々と富樫。

ざわつく観客たち。

「あれ富樫じゃねえか？」という声が聞こえてくる。

伊奈がマイクを持ってリングにあがる。

伊奈「ただいまから、特別試合として変則タッグマッチを行います。赤コーナーあ、キュートでドSな女王様、北川奈々あ！」

手をあげ歓声に応える奈々。

伊奈「そしてもう一人は、マサチューセッツの暴れ猿、成塚圭太！」

歓声。

伊奈「そして青コーナーは、どこの誰かは知らないけれど、実は誰もが知っている。謎のマスクマン、マスクド・スパータイチャー！」

○リングに向かう道。

頭を抱える木島。

木島「校長、あれ富樫くんですよ。何を考えてるんだ、あの男は！ ど、どうします？」

安田「何を言ってるんだ、君は？ どこに富樫くんがいる？ あそこにいるのは、マスクド・スパータイチャーだろう。そう言うてたじゃないか！」

木島「しかし、校長……」

安田「(強く) あれはマスクド・スーパーティ
チャー！ マスクマンの正体を明かすのは
タブーなんだよ。よく覚えておきなさい！」
と言って十字を切って祈る。

○リング上

向かい合う圭太、奈々と富樫。

富樫「就職の面接をブツちぎって来てやったぞ」

圭太「当然。だって先生は、プロレス研究会の顧問じゃん。最後まで、ちゃんと面倒みてくれないと」

富樫「(笑って) 俺を先生と呼ぶな。(奈々に) 楽しそうにやってるな」

奈々「(笑って) まあ、おかげさまで、あたしも少し大人になりました」

圭太と奈々、コーナーに向かう。

富樫「(その背中に) 成塚」

圭太、振り返る。

富樫「礼を言うぞ」

圭太「どういたしまして」

コーナーに戻った圭太、奈々に、

圭太「北川、ツープラトンのドロップキックをやろう。ドロップキックできるか？」

奈々「できないよ、そんなの」

圭太「できるよ。ただ跳べばいいんだ。なんにも考えずにただ跳べばいいんだ。俺が合図したら一緒にドンだ！」

奈々「わかった。やってみる」

ゴング。

奈々が飛び出して行き、ローキックからパンチを富樫にメチャクチャ見舞う。

大喜びをする観客たち。

圭太にタッチ。

圭太、フライングクロスチョップから富樫に組み付く。

圭太「先生、ロープよろしく！」

富樫「任せろ！」

圭太、富樫を思い切りロープに振る。

圭太「(叫ぶ) 北川！」

奈々、リングに飛び込んでくる。

富樫がロープから戻ってくる。

圭太と奈々、見交わす目と目。

ピタリのタイミングで二人は宙に舞う。

そして、完璧なツープラトンのドロップ

キックを富樫に炸裂させ……、

おしまい